

農林水産大臣賞受賞の (有) 真野農場を訪ねて

(公財) 日本豆類協会

北海道中札内村の(有)真野農場代表の真野保氏(39才)は、家族経営を基本に51haで畑作経営に取り組んでおられ、小豆、大豆を含む豆類、小麦、てん菜、ばれいしょに地域の特産である枝豆を組合せた4年輪作体系を確立されました。第46回全国豆類経営改善共励会(主催:全国農業協同組合中央会、全国新聞情報農業協同組合連合会)では、徹底した輪作体系の維持とGPSガイダンス搭載トラクターの導入による正確な作業により、小豆の高い収量性(平成29年産で10a当たり443kg)を実現したことが評価され、小豆・いんげん・落花生の部において農林水産大臣賞を受賞されました。

豆類協会では今回の受賞を受けて、平成30年9月5日に真野農場を訪ねて、真野代表から直接いろいろなお話を伺いましたので、ここではその時のインタビューの様子をご報告します。

真野代表は、当日まさに枝豆の収穫作業のまっただ中のお忙しさにもかかわらず、貴重な時間を割いて対応いただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

1. インタビュー概要

①家族構成:父、母、本人、妻、子供(長男、長女、次男、三男)で雇用なし。農作業は子供を除いて全員が関わっている。なお、コストが嵩むので、今後も雇用を入れるつもりはない。

②作付体系(H30):平成30年度の作付面積は、てんさい13.5ha、でん原馬鈴薯13.5ha、枝豆5ha、サヤインゲン2ha、小麦10ha、種子小麦2ha、小豆5ha(エリモ小豆、



真野氏(H29農林水産大臣賞)の近影



真野氏の小豆畑と住宅・倉庫(赤い屋根)

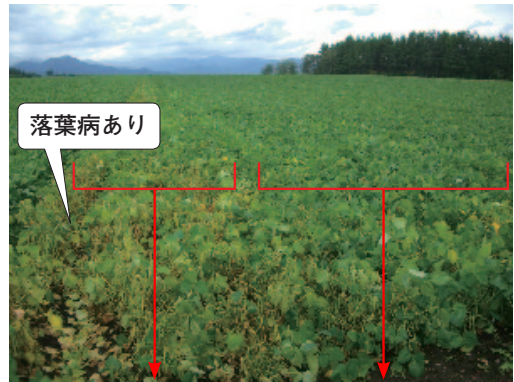
キタロマン)、(合計約51ha)で、基本的な輪作体系は、小麦→甜菜→馬鈴薯→豆である。この作付体系は、父親のころから基本的には変わらないが、小豆のような価格変動の大きな作物については、毎年の価格をみて作付面積を決めている。例えば、おとしは小豆の価格が思わしくなかったので、小豆の作付は全く行わず、その代わりに馬鈴薯を植えた。

なお、出荷は全て農協経由である

③小豆収穫機械：コンバインだと収穫ロスが大きいので、ビーンカッターで小豆を切り倒し、その後にピックアップ・スレッシャーを入れて収穫している。十勝では、概ねこの収穫方法である。自分は5haの作付面積なので、3~4日もあれば収穫できる。もちろんコンバイン収穫ならば1日で10haも収穫することができると思うが、ロスが大きく品質も落ちるので、実施していない。

④小豆栽培上の工夫：今年は天候が悪かったこともあり、周辺農家の小豆の収量は4俵ぐらいだと思うが、自分のところは6俵ぐらいになると考えている（それでも、いつもを100とすると95ぐらいの収量だと思う）。このような高収量を維持できる理由は、もともと収量性の高いエリモ小豆を使って、8~10年の間隔を開けて栽培していることが大きいと思われる（キタロマンなら5年間隔でもなんとかなるが、エリモ小豆を5年間隔でつくと落葉病等の病害がでる）。

また、防除の際には、スプレー（幅



5年間隔のエリモ小豆 8年間隔のエリモ小豆



8年間隔のエリモ小豆の莢

30m) を使って、小豆の頂点ぎりぎりのところから散布して、無駄なく薬剤を使っていることも多収の理由だと考えられる。なお、当該スプレーを用いると、1時間で5haの防除散布が可能となる。なお、こうした散布方法を可能としているのは、導入したスプレーの薬剤散布アームが湾曲しにくい機種を使っているからである。

⑤就農の経緯：自分の両親が農業をしているのを小さい頃からみて、手伝ってきたこともあり、高校を出るとすぐに何の疑いもなく就農した。もともと農業は好きで、中学校の頃には、トラクターの運転等を含めて全ての農作業を自分一人で行えるようになっていた。そして、35歳の頃には父親から経営移譲してもらった。

⑥農業の魅力：農業の魅力は、なんと言っても手をかけた分だけ、収入としての見返りが有るので、やりがいがあることだ。また、自分は六次産業化には取り組んでいないので、冬は決算事務を除くと好きなことができるということも魅力の一つである。今は、子供（中学生の女の子）がスピードスケートをやっており、北海道の強化選手にもなっていることから、冬の間はその子の練習や試合の支援に走り回っている。

⑦今後の展望：当面は、現状の経営規模と作目を維持することを目指す。但し、トラクターのGPS化が進んでいるので、こうした機械を積極的に取り入れてさらなる省力化を目指していきたい。現状でもトラクターは8台持っており、その内の5台はGPS付きである。もう5年もすると人間が全く乗らなくても良いトラクターで出てくるのではないかと期待している。

⑧子供の農業への見方：4人の子供は、みんな農業を好いてくれていると思う。但し、自分のころと違って、機械が大型化して危ないので、作業現場には近づけないようにしている。当然、今は自分のころと違って省力化が進んでいるので子供の手伝いを必要としている訳でもない。土日は農作業は基本的に行わず、子供の相手をしている。

2. 枝豆の収穫状況

当日は、枝豆の収穫最盛期だったので、その様子を参考までに報告する。

そもそも、中札内村は国内有数の枝豆産地であり、本地域の枝豆栽培は農協の事業

として実施している。栽培方法も全て農協の指示通りに行い、収穫作業においては農協のオペレータの運転で、農協所有のエダマメ・ハーベスター（フランス製、4千万円、平成17年導入）が、素早く収穫していく。

収穫方法はもぎ取り方式で、収穫が終わったほ場には、枝豆の枝がそのまま残っている。当日は、3~4台のハーベスターが同時に稼働して収穫し、真野氏のトラックの荷台に収穫した枝豆を直接流し込んでいた。真野氏は、そのトラックを使って農協に持って行くだけで、収穫作業は全て農協の手で、手際よく行われていく。その様子は壮観であった。

枝豆を作付体系に取り入れることは、9月末に播種が始まる北海道の秋まき小麦作付のためには、とても重要である。



農協の枝豆収穫機が真野氏のほ場で収穫



真野氏のトラックに枝豆を積載